

手

職場の一角に

何処にでもあるような

小さな食堂

その厨房の中で

いつも

ひとり忙しく働く女性がいる

それが古谷さんだ

昼食のおかずが

古谷さんの手を見ていると

何とも言えぬ

有り難いものに思えてならない

それは

僕の

一感情にすぎないのだけれど

そう感じさせるものは

紛れもなく

古谷さんの

その手だ

食事を待つものに急かされ

時に

忙しさのあまり

赤く燃える器の上で

何度となく火に曝される

だから

古谷さんの手はいつも

ひぶくれて腫れ上がっていた

そんなことをもう

何年もやっている

食物を食べる

という行為は 人にとって

知る以前の

始原現象ではあるけれど

そのことに たえず

生きものの生き死にかかわっている

ということをつねに

認識している人は少ない

どんなに文明が栄えようとも

食物には

生きものの死が

永遠に付き纏っているのだ

そうした仕事を みんなのために

あるいは

自分のために

何年もやっている

これからも……

そう思うと なおさら

昼食をいただく度に

僕は

古谷さんの手に

感謝せずにはいられない

仮像では計り知ることが出来ない

やさしく

そして たくましい

それが

母親の

をんなの

手なのだ

働きのきれいな手は 今日も
慌ただしく
火の上を駆け回っている